みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

新しくなった日本文化の展示：日々のくらしを中心に (民博の実践論)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 真吾 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009084

新しくなった日本文化の展示—日々のくらしを中心に

日髙　真吾

はじめに

国立民族学博物館では、二〇〇八年度から二〇一五年度の八年間をかけて常設展示にあたる本館展示場を新しく更新している。この事業は、世界を取り巻く現代の様相を鑑みながら、展示を新しく構成するものであることから、民博ではあえてリニューアルではなく、新構築と称している。本館展示場全体の地域展示・通文化展示全体を新しくするこの事業は、開館以来、初めての試みである。

民博の本館展示場のなかで「日本の文化展示」は、最大の展示場面積であることから、二〇一二年度から二〇一三年度の二年度にまたがる事業となった。そして、今回の新構築の結果、

写真1　「祭りと芸能」セクション

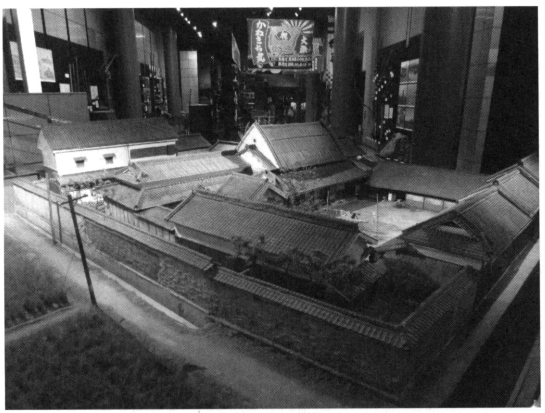

写真2　「日々のくらし」セクション

写真３　「沖縄地方のくらし」セクション

写真４　「多みんぞくニホン」セクション

「祭りと芸能」（写真１）、「日々のくらし」（写真２）、「沖縄地方のくらし」（写真３）、「多みんぞくニホン」（写真４）の四つのセクションから展示を構成した。

各セクションの概要は、「祭りと芸能」セクションでは、普段とは趣を異にするハレの機会でおこなわれる多様な祭りや年中行事をテーマとした。次に「日々のくらし」では、亜寒帯から温帯、亜熱帯にいたる日本の気候、山地を中心としつつ、平野や盆地、峡谷が複雑に入り組んだ日本の地形に適した生活様式の多様性をテーマとした。また、「沖縄地方のくらし」では、琉球王国として独立国家の歴史をもち、戦争をはじめとする歴史的な転換期を乗り越えながら、周辺地域の文化を取り込み、独特の文化を形成している沖縄文化の様相をテーマとした。最後の「多みんぞくニホン」では、近年、特に身近な存在となった移民について、日本社会の一員として生きる彼らの文化的な多様化、活性化をテーマとした。

このなかで、筆者は「日々のくらし」、「沖縄地方のくらし」を中心に展示を担当した。特に「日々のくらし」は、近藤雅樹教授と展示構成を検討したセクションである。

そこで、本稿では近藤先生の意見を反映しつつ、展示を構成した「日々のくらし」セクションの内容について述べてみたい。

1　以前の日本の文化展示（第1次日本の文化展示）について

最初に今回の新構築で生まれ変わる前の日本の文化展示（以下、第一次日本の文化展示）について整理する。第一次日本の文化展示は、今回の新構築と同様に二年度にわたる展示制作であり、一九七八年度と一九七九年度に実施された。その詳細は当時、展示制作のプロジェクト・リーダーの役割を果たしていた守屋毅によって紹介されている〔守屋　一九八四〕。

「日本の文化展示」は、本館展示場の最後に位置している。これは、来館者が世界のさまざまな地域の民族について展示を通して接し、最後に日本の生活文化と対面する仕掛けとなっているものである。つまり、世界中の諸民族の文化を見てきた目で、あらためて自らの生活文化の再発見を促すという狙いがこめられているのだ。そしてこの狙いは、今回の新構築の全体計画においても踏襲されている。

第一次日本の文化展示について、守屋は、「ハレ」の側面から「祭りと芸能」を、「ケ」の側面から、「日本のくらし」を軸にした展示であったと述べている〔守屋　一九八六〕。ここでいう「ハレ」とは、年中行事や人生儀礼、さらにはそれらと密接な関係を持つ芸能の世界である。「ケ」とは、先ほどの「ハレ」という非日常的な時間や空間に対して、日常生活の諸相を示す世界である。非日常の生活空間と日常の生活空間を対比させることで、日本文化の様相を示そうと試みたこの展示は、世界のなかの日本を理解する上では完成度の高い展示だったと考える。しかし、この展示空間は、一九九五年一月十七日の阪神・淡路大震災をきっかけに大きな変更を余儀なくされた。阪神・淡路大震災の影響で改正された耐震強度の基準値を満たすため、一部の壁面に筋交いを入れる耐

震工事がおこなわれ、展示の一部を撤去せざるを得なくなったのである。そして、このときの工事では、特に「ケ」の側面を示す展示空間への影響が大きかった〔近藤 二〇〇六〕。

今回、展示を新しくするにあたり、近藤先生と日本の文化展示場に何度か足を運び、打ち合わせをした際、日本の民族学博物館である「日本展示場」が日本の日常のくらし全体を示すことができなくなっていることを嘆いていたことが印象に残っている。

2 新しくなった日本の文化展示場（以下、第二次日本の文化展示）について

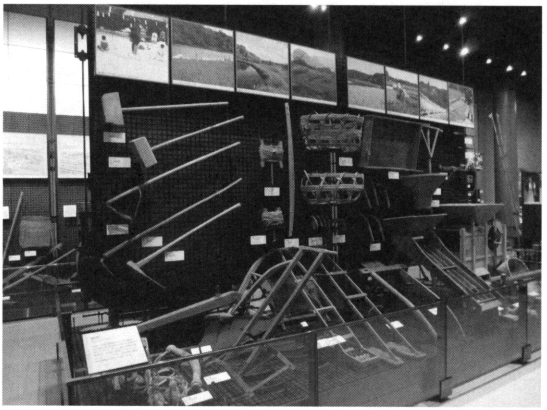

写真5 「里のくらし」

写真6 「海のくらし」

今回、「第一次日本の文化展示」を再編、制作するにあたって、「第一次日本の文化展示」で「ケ」とされていた空間は、今回は「日々のくらし」というセクション名のもと、全面的に展示を更新することにした。ここでは、「全体性」、「地域性」、「現代性」の三つの視点を柱として展示を構成した。

まず、「全体性」については、すでに配置されている民家模型

写真7　「町のくらし」

写真8　「山のくらし」

を機軸に、「里」、「海」、「町」、「山」という生活空間で営まれる日々のくらしに着目し、「里のくらし」（写真5）、「海のくらし」（写真6）、「町のくらし」（写真7）、「山のくらし」（写真8）というサブセクションを設けた。これらのサブセクションのうち、「里のくらし」「海のくらし」「山のくらし」については、「第一次日本の文化展示」でもテーマ設定がなされ、それらを引き継ぐ形をとった。そして、今回はこれらのなかに新たに「町のくらし」という生活空間の要素を加えたのである。この「町」という生活空間を新たに追加するというのは近藤先生の強いこだわりでもあった。確かに、「町のくらし」で営まれる都市の生活文化は、江戸時代に貨幣経済が発達する過程で定着してきたものであり、現代の生活様式に大きな影響を与え、現代日本社会の基層文化のひとつとなっていることには違いない。このことから、「日々のくらし」セクションには欠かせないテーマとして、新たに加えることとしたのである。

次に「地域性」という観点からは、南北に長い日本列島は、北と南で大きく生活環境を違え、その地域で育まれる文化もやはり多様なものとなっている。その多様性について、今回は、北の日本の生活文化として東北地方に着目し、「東北地方のくらし」（写真9）とした。「東北地方のくらし」では、東北地方の厳しい環境や歴史のな

かで生みだされてきた住空間や信仰、工芸などの独特の文化をみることができる。また、東日本大震災において、民博がおこなった被災した文化遺産の支援活動についても紹介している。なお、南の日本の文化として「沖縄のくらし」を二〇一四年度に制作し、北の日本文化と南の日本文化が対比できる仕掛けづくりを行っている。

「現代性」では、「里のくらし」、「海のくらし」、「町のくらし」、「山のくらし」の各サブセクションの最初にそれぞれの生活空間の現代の情景を示す写真パネルを展示することとした。このことによって、今後、将来にわたって変化する生活空間をある程度リアルタイムで展示更新することを可能としている。

写真9　「東北地方のくらし」

3　展示制作者と来館者の関係

新しい展示を考えていくなかで、民博としての主張を盛り込みながら、来館者が望む展示とはどのようなものか。この点は、展示内容を考える際に合わせて常に意識していたことである。近藤先生は口数が決して多い方ではなく、議論といってもほとんど私が一方的に話し、それに対して的確なコメントをいただくということが多かったのだが、この話題については、まずは納得のいく展示の骨子を固めてから、来館者視線を意識してみてはという助言を受けた。確かにそのとおりである。さりとて、来館者の視線はやはり気になる。

そのようなことを考えていくなかで、私は展示を制作する研究者の意図とその展示を観覧して来館者が理解する内容の違いに注目することとした。

展示の制作者と来館者の関係性については、一九八〇年代から、いくつかの博物館展示に関する先行研究でも述べられている。このなかで、端信行は、一九八〇年代以降、博物館の展示が宝物（国宝や重要文化財など）を保存・陳列するところであるという理解から、博物館と来館者のコミュニケーションの場としての重要性が理解されるようになったと指摘している〔端 二〇〇〇〕。栗田靖之は、生涯学習をはじめとする市民の知的要求の高まりや、知的水準そのものの高まりによる最新の学術情報の提供の場として展示場が果たす役割の重要性をうたっている〔栗田 二〇〇〇〕。また、橋本裕之は「担当者が提示する意図されたメッセージと来館者が実践する解釈の個人的な過程を調停することに努めなければならない」と指摘している〔橋本 一九九八〕。これらの指摘は、展示制作をしていく私たち研究者と来館者との関係について重要な示唆を含んでいる。そもそも博物館で行われる展示制作は、私たち研究者が自分たちでテーマを設定し、そのテーマに沿った展示資料を並べていく作業である。しかし、その展示のテーマや展示された資料について、来館者は必ずしも展示を制作した側とまったく同じ視点でその展示を観覧し、展示制作側の意図と同じ意図を持って理解するものでもない。ここに、展示制作側と来館者との展示理解の隙間が生じてくる。この隙間をどのようにあつかうのかについて、私はその隙間を前提として、展示テーマを設定し、展示制作者と来館者が相互理解するための展示活動については、別途、実践することとした。

また、展示を観覧する来館者をどのように意識するかについては、新しく更新した展示場のアンケート結果も参考にした。民博では二〇一〇年より、新しく展示場を更新した展示場において、アンケートを行っている。ここでは、展示の面白さ、展示のわかりやすさ、展示場所の居心地の観点から、各項目について、来館者がポジティブに受け入れているか、ネガティブに受け入れているのかを確認することとしている。また、どの点が良く、どの点が悪いのかについて、インタビューを行い、良い点、悪い点を具体的に把握し、各地域展示プロジェクト・

チームに報告を行っている。そして、各展示プロジェクト・チームは、アンケート調査の結果を分析するとともに、チーム内での反省点を協議し、これらの結果を合わせて修正計画を策定し、翌年度に展示場の修正を行うこととしている。

これらアンケートの結果から、特に「わかりやすい展示」についてあらためて分析すると、実物資料の展示、自身の生活にとって身近な資料の展示、象徴的に目立つ資料の展示に、丁寧な映像と解説を組み合わせることがより理解しやすい展示と評価される傾向が明らかになった。そこで、「第二次日本の文化展示」では、来館者が自身の生活を想起させやすい展示テーマを設定し、可能な限りの実物資料の展示と象徴的な展示コーナーの設置、各コーナーの丁寧な解説を意識することとしたのである。

おわりに

民博における開館時における展示の基本理念は、一九七五年十二月にとりまとめられた『国立民族学博物館における展示の基本構想』（以下、展示基本構想）に集約されている〔国立民族学博物館 一九八五〕。この展示基本構想では、展示表現について、展示物を貴重な宝物あるいは美術品としてあつかう美術的表現を「個物鑑賞主義」、展示物の周辺の状況、つまりそれらのものが使用されていた状況を表現する印象的表現を「再現主義」や「生態的展示」、十分な解説をつけ、あたかも民族学事典を一枚、一枚めくっていくような説明的表現を「説明的展示」として三つに分類、検証している。その結果、三つに分類した展示表現のうち、説明的表現をとりつつ、展示物の周辺の状況、生活場面のなかに存在する意味的連関をたぐっていく「構造展示」を目指すとされている。このような、個々の展示物をそれぞれ関連させながら、展示テーマの主眼となる地域文化を表象しようとする「構造展示」の思想は「第二次日本の文化展示」においてもはっきりと意識した。

また、『国立民族学博物館における第二期展示基本構想』（以下、第二期展示基本構想）は、展示基本構想をもとに製作された常設展示を全面的に改変することを目指し、二〇〇一年にまとめられた。ここでは、時代の変化と研究の進展に対して、迅速に対応する体制を整備し、展示する側（研究者）、展示される側（対象文化の人びと）、そして展示を見る側（来館者）との間に、相互の対話と啓発の場、すなわち、フォーラムとしての民族学博物館を目指す方向が示されている〔吉田 二〇〇六〕。残念ながら、この第二期展示基本構想に基づいた展示の改修の準備は、民博が二〇〇四年に法人化したことを契機に一時、中断された。しかし、法人化後、新たにまとめられた「国立民族学博物館における展示基本構想二〇〇七」（以下、展示基本構想二〇〇七）〔国立民族学博物館ＨＰ：二〇一四年四月二十九日〕では、このフォーラム型の展示の考え方を継承しつつ、四つの考え方を軸にしてとりまとめられ、今回の新構築事業に結びついている。

以下、簡単に概略を示しておく。

一つ目は、「大学共同利用機能の活用」である。つまり、大学共同利用機関として諸大学の研究者を結集し、展示に国内外の大学における最新の研究成果を反映させるとともに、その内容を広く一般にも理解・活用できるものとし、最先端研究の成果と社会との共有を図るものとして、民博以外の研究者との連携が強く意識されている。二つ目は、「フォーラムとしての展示の実現」である。フォーラム展示では、展示に関わる研究者と展示の対象者である文化に属する人びと、そして来館者とのあいだに、相互の交流と啓発をもたらす場の実現を目指すものとして、これは第二期展示基本構想の考え方を踏襲したものとなっている。三つ目は、「情報提供の高度化・深化」である。積極的な情報活用は、モノだけの展示でなく、展示物と映像・音響・データベースなど多様な情報を有機的に連携させ、そのモノを生み出した人びとの生きた姿を理解できる展示技術を開発した。これは展示基本構想のなかでうたわれていた情報展示の思想をさらに強化したものである。四つ目は、「来館者の多様な要求

にこたえるための展示」である。民博の展示の利用者は、年齢や国籍、言語など、あらゆる面で多様化してきている。さまざまなメディアを駆使し、小学生から大学生・大学院生、さらには外国からの来館者やハンディキャップをもつ人びとも含めた、広範な利用者の要求に対応できる、ユニヴァーサル・ミュージアムを先導する展示を実現するために、多様な来館者対応を可能にする展示空間の創出を目指している。

このなかで、二つ目の展示目的とされた「フォーラムとしての展示の実現」について、民博が実施している来館者とのコミュニケーションの方法について紹介したい。

民博では、現在、「みんぱくウイークエンドサロン」を毎週日曜日に実施している。本プログラムは、展示場内で民博の研究者が、来館者に展示にまつわるテーマや自身の最新の研究内容を紹介するものであり、来館者が研究者により近い形で接することができる機会となっている。また、民博ウイークエンドサロン以外にシンポジウムや研究公演、ゼミナール、友の会の講演など、さまざまな形で研究者と来館者の接点を設けており、これらの活動は展示場マネージメントの中心的な活動になりつつある。特にこれらの試みは、新しく展示を更新した展示場において、「みんぱくフォーラム」としてさまざまな関連事業が行われている。たとえば、日本の文化展示場では、二〇一三年度の「みんぱくフォーラム」として、「世界のニッポン、みんぱくのニッポン」を開催した。このフォーラムでは、日本展示プロジェクトのメンバーが中心となって、「祭りと芸能」「日々のくらし」の展示場クイズ「みんぱくQ」、体験プログラム「瞽女（ごぜ）文化にさわる」、体験セミナー「日本の漆を考える」、研究公演「雄勝法印神楽みんぱく公演」のほか、三回連続の民博ゼミナール、三回連続のウイークエンドサロン、二回連続の友の会講演を行った。

このような来館者との接点は、展示の本質を研究者と来館者あるいは展示対象となっている地域文化に属している人びとが互いに語り合う絶好の機会でもあり、今後、より積極的に展開すべき展示場マネージメントの軸に

なると考える。また、開館当初から設置されているビデオテークブースや電子ガイド、あるいは二〇一一年度にオープンした探求広場のような情報提供プログラムも展示の解説だけでは語りきれないさまざまな情報を来館者に提供できるシステムであり、ここにも来館者との対話のきっかけが設けられていることも注目できる。

博物館展示、特に民族学博物館の展示は、さまざまな文化を持つ人々の生活や地域に対して来館者が興味を持つきっかけを作る装置といえる。また、博物館に来館し、異文化理解への興味をもった来館者が、その興味をどのように育むのかについても、博物館展示の構想のなかに組み込んでいくことも重要であると考える。近藤先生からはこれらの点について、常に世界のなかの日本を意識した日本文化の展示について助言をいただいていた。また、これらの視点は、近藤先生が晩年に力を注がれていた在外日本資料研究への姿勢からもうかがえる。今後、民博において日本研究を行っていくうえで、日本から世界を見るという近藤先生の視点も意識し、参考にしながら活動を進めていきたい。

【参考文献】

栗田靖之「みんぱくの展示の課題と展望」国立民族学博物館調査報告16『新しい展示技法の開発と子ども博物館のコミュニケーションに関する研究』二〇〇〇年
国立民族学博物館「国立民族学博物館基本構想」『国立民族学博物館十年史資料集成』一九八五年
近藤雅樹「東アジア（日本の文化）展示」『国立民族学博物館三十年史』二〇〇六年
橋本裕之「物質文化の劇場：博物館におけるインターラクティブ・ミスコミュニケーション」『民族学研究』六二巻四号　一九九八年
端信行「今、なぜ展示技法の開発なのか」国立民族学博物館調査報告16『新しい展示技法の開発と子ども博物館のコミュニケーションに関する研究』二〇〇〇年
守屋毅「東アジア（日本の文化）展示」『国立民族学博物館十年史』一九八四年
守屋毅「日本の文化」『国立民族学博物館展示案内』一九八六年
吉田憲司「第二期展示基本構想」『国立民族学博物館三十年史』二〇〇六年